opusdei.org

四旬節、復活祭への 道

四旬節は過越の神秘、すなわち主のご受難とご復活という世界の歴史の中心点一私たちの人生の中心点一へと向かう道です。

2025/04/07

「主キリストは四十日の断食によって、四旬節の務めを行うわたしたちに模範を示されました。悪霊のいざないを退けられた主は、わたしたちが罪の力に打ち勝ち、清い心で過越

教会は四旬節の間、私たちが心と行いを新たにするよう呼びかけ、日ごとにこの「過越の神秘の中心性」を見出すよう導きます。それは神の御手に私たち自身を委ねることにより、「キリストの死と復活の神秘を深く悟」り、「日々、キリストのいのちに生きる」 ほためです。

「ところで人間とは異なもので、こんなに素晴らしいことも忘れ去り、 これほどの秘義にも慣れてしまいま

す。この四旬節を機会に、キリスト 信者である限り浅薄な生活を送るこ とはできないのだと肝に銘じたいも のです。人々と同じく仕事に没頭 し、夢中になしると「同時に神にも 夢中にならなければならないので す。私たちは神の子なのですからし [A]。それゆえ、四旬節の間、私たち は祈りの中で、回心の必要性を見つ め直し、主へと歩みを向け直し、心 を清めます。「神よ、わたしの内に 清い心を創造し 新しく確かな霊を授 けてください」。これは四旬節に教 会がしばしば唱えるよう促す「ミゼ レーレ」(詩編50 [51]) の言葉で す。聖ホセマリアも、幾度となくこ の詩編を祈りました。

イスラエルの荒れ野での旅路

四旬節は、救いの歴史のいくつかの 重要な出来事に深く根ざしていま す。その一つが、神に選ばれた民の 荒れ野での旅です。イスラエルの民 にとって、この四十年間は試練と誘惑の時でした。主は絶えず彼らととに歩み、ただ神のみに頼るべむきことを教え、石のように固い民の心を表したいきましたでした。それはまた、治絶え間ない恵みの時でした。民はもしたが、神は彼らを慰ったといるましたで養い、メリバの岩からを表したでで、メリバの岩からで表い、メリバの岩からで表したでで、メリバの岩からで表したでで、メリバの岩からで表したでで、メリバの岩からで表したでで、メリバの岩からで表したでで、メリバの岩からで表したでで、

よって生きることをあなたに知らせ るためであった | 「77]。この言葉は、 今日の私たちにも向けられていま す。私たちも人生の荒れ野を歩みな がら、日々の苦労や困難に直面しま す。しかし、同時に神の父としての 心遣いに支えられています。それ は、家族や友人、あるいは名前も知 らぬ善意の人々を通して表されるこ ともあります。主の計り知れない導 きのうちに、私たちは少しずつ神の 心のうちに引き寄せられていきま す。そしてこの神の心こそ、真の約 束の地なのです。「わが子よ、あな たの心をわたしにゆだねよ。 喜んで わたしの道に目を向けよしい。

出エジプトの多くの出来事は、将来起きることを前もって表すものでした。実に、最初の旅に加わった人すべてが約束の地に入れたわけではありませんでした。そのため、ヘブライ人への手紙は詩編94(95)を引用し、神の民の反抗を嘆くと同時に、

新たな出エジプトが始まったことを 明らかにします: 「先に福音を告げ 知らされた人々が、不従順のために あずからなかったのですから、 再 び、神はある日を『今日』と決め て、かなりの時がたった後(…)、 『今日、あなたたちが神の声を聞く なら、心をかたくなにしてはならな い』とダビデを通して語られたので す | 。この「今日 | とは、キリスト によって開かれた時代のことです。 キリストの受肉、牛涯、そして栄光 により、主は私たちを最終的な出工 ジプトへと導いてくれます。その旅 において、神の約束は完全に成就さ れます。キリストは私たちのために 天に場所を備え、神の民のための安 息を獲得します。「それで、安息日 の休みが神の民に残されているので す。なぜなら、神の安息にあずかっ た者は、神が御業を終えて休まれた ように、自分の業を終えて休んだか らですしい。

キリストの荒れ野での歩み

四旬節第一主日の福音では、イエス が、私たちと連帯して、四十日間荒 れ野で過ごした後、誘惑を受けるこ とを望んだことが語られます。イエ スのサタンに対する勝利は、私たち を希望で満たします。イエスととも にいれば、私たちも内的な戦いにお いて勝利できることがわかるからで す。ですから、私たちはもはや誘惑 に心をかき乱されません。誘惑は、 自分自身をもっと知り、神をさらに 信頼する機会となります。快適な生 活を追い求めることは、幸福の幻影 にすぎないことを悟り、聖ホセマリ アとともに、「まだ取り組むべきこ とがたくさん残っている」「特に、 高慢な心が幅を利かせている」「利 己主義が影をひそめ、私たちの内に キリストが成長できるためには、再 び生活を一新し、より完全・忠実 に、また、より深い謙遜を身につけ る決意が何にもまして必要だし「あ

の方は栄え、わたしは衰えねばならない」mmことに気がつきます。

自らの弱さを知ることは、私たちを 謙遜な祈りへと導き、信仰・希望・ 愛を生き生きとさせます。聖ホセマ リアは頻繁に「主よ、私をあなたか ら遠ざけるものを、私から遠ざけて ください!ワァzアと祈りました。イエス とともにいることで、私たちは誘惑 を断固として退ける力を得ます。そ して誘惑とは決して対話しません。 「イエスのこたえ方によく注意して ください。イエスは、地上の楽園で エバがしたように、サタンと対話す ることはしません。 (…) イエス は、(…)神のことばのうちに逃れ ることを選び、神のことばの力を もってこたえます。このことを心に 留めてください。誘惑のとき、すな わち、わたしたちがさまざまな誘惑 を受けるとき、サタンと議論しては なりません。むしろ、つねに神のこ とばによって身を守ってください。

そうすればわたしたちは救われます」[13]。

四旬節第二主日に読まれる主の変容の話は、私たちが限界を持つ者であっても、勝利は確実であるという確信を新たにしてくれます。日々るな生活の中で主の十字架と一致する。その栄光にもあずかります。そのためには、信仰を養うことが必っためには、信仰を養うことが必ず。A年の四旬節第三~五主日で読まれる福音は、信仰を深める道を教えてくれます。

- サマリアの女性は、罪を乗り越 えてイエスをメシアとして認 め、聖霊の「生ける水」によっ て愛の渇きを癒しました[14]。
- 生まれつきの盲人は、無知を乗り越えてキリストを「世の光」として受け入れました。一方で、〈世の知者〉たちは盲目の状態にとどまりました[15]。

ラザロの復活は、キリストが私 たちに新しい命をもたらすため に来られたことを思い起こさせ ます[16]。

これらの場面の登場人物になったつ もりで、福音書を黙想することは、 個人的な祈りの助けとなり、四旬節 の間、より強く神の現存を保つ役に 立つことでしょう。

子としての回心の道

もに、御父のあわれみによる救いを 願います。神が、私たちの人生に愛 のまなざしを注ぎ、罪を贖うゆるし を与えてくれるよう祈ります。

典礼は、伝統的な償いの業を実践す るよう私たちを招くことによって、 回心が「私たちの回心」になるよう 助けます。これらの業を通して、私 たちは、神との関係(祈り)・隣人 との関係(施し)・自分自身との関 係(断食)を正します「181。これが聖 ホセマリアの言う「償いの精神」で す。実生活においてこの精神を生き る機会はたくさんあります:「償い とは、たとえ、体が抵抗し、心が妄 想のなかに逃げこもうとしても、決 めた時間割を正確に守ること、決 まった時刻に起き上がること、骨の 折れる難しい什事であっても理由な く遅らせずに果たすことです。神と 隣人と自分に対する義務を果たすた めに、必要な時間を見つける努力、 これも償いです。疲れや嫌気や冷淡

な心であるにもかかわらず、祈りの 時間になれば祈りをする。そうすれ ば、あなたは償いの人なのです。償 いとは、自分の家族をはじめ、隣人 と常に最高の愛徳をもって接するこ と、つまり、病人や悲嘆に打ちひし がれている人々を細やかな心でお世 話し、都合の悪い時に訪れるうるさ い人々を我慢して迎えることです。 さらに人々の正当な必要を満たすた め、快く計画を変更し、あるいは中 止することも。日々出くわす幾多の 小さな困難を快活に耐える、始めた ときの熱意が薄れても任務を中途で 放棄しない、出されたものをわがま まに負けないで感謝の心でいただ く、いずれも償いのわざです。両親 や、一般に指導・教育の任に携わる 人々の場合なら、必要な時に、主観 や感傷をまじえずに、過ちの本質や 当事者の状態を勘案しながら、過ち に陥った者を正すことが償いになり ます | 1197。

人々に対する誠実な献身として表れ ます。

秘跡を通して回心の道を歩む

罪との日々の戦いにおいて、ゆるし の秘跡と聖体祭儀は、特別な恵みの ときです。私たちの内的償いは、告 解によってより完成されたものにな ります。償いにおいて、私たちの心 構えはとても大切ですが、主導権を 握るのは神であり、神が私たちを回 心へと導くのです。「神の傑作」「231 であるこの秘跡を通して、神が私た ちの堕落した自由をどのように治療 してくれるかを感じとることができ ます。私たちができることについ て、聖ホセマリアは具体的なアドバ イスをくれます。「私は皆に、痛悔 の祈りをたくさん唱えるという信心 をもつことを勧めます。そして、ゆ るしの秘跡に対する特別な愛を持つ ことは、その信心の実践的かつ外的 な表われです!「マネイ」。「ゆるしの秘跡

においてこそ、あなたと私はイエス・キリストご自身を着、その功徳 を身にまとうのである | 1251。

四旬節は、この「ゆるしの秘跡に対する特別な愛」を育む絶好の機会です。この秘跡を大切にすること、その素晴らしさを多くの人に伝えることは、その愛の表われです。

司祭は、神の名によってゆるしを与 えた後、秘跡の終わりに次のような 美しい祈りを唱えることができま す。「私たちの主イエス・キリスト の受難、幸いなおとめマリアとすべ ての聖人の執り成しによって、あな たの行うあらゆる善と耐える悪が、 あなたの罪の償い、さらなる恵み、 永遠の命という報いになりますよう に。平和のうちに行きなさい | [26]。 この古から伝わる祈りによって、司 祭は秘跡の実りが信者の生涯全体に 及ぶように神に願います。この祈り が示すようにその効果は、キリスト

のご受難とご復活から来るものです。

典礼を通して、教会は私たちが四旬節の道を〈優雅に〉歩むよう招いています。秘跡を頻繁に受け、神の言葉を熱心に黙想し、償いに努めると同時に、喜びを生きます。四旬節第四主日はこのことを特に強調し、

「神の民よ、喜べ」[29]と呼びかけます。これらの業の実践は私たちの魂の感度を高め、聖週間に向けて心を

整えてくれます。そして聖週間にお いて私たちは、地上におけるイエス の生涯の頂点であるご受難とご復活 を新たに体験するのです。「キリス トの生涯と死去はわたしたちの営む 生活そのものになるべきである。キ リストが神の愛ゆえにわたしたちの なかで生きてくださるように、犠牲 と償いのうちに死ななければならな い。そこで、主に協力して全人類を 贖いたいとの強い望みをもち、キリ ストの御跡に従うのである一図の。私 たちのために命を捧げる主を仰ぎ見 ながら、罪からの清めを味わい、神 がもたらしてくれる救いの喜びを再 発見することができるでしょう。神 よ、「御救いの喜びを再びわたしに 味わわせーぽれてください。

[1] 四旬節第一主日、叙唱。

- [2] 聖ホセマリア『知識の香』64 番。
- [3] 四旬節第一主日、集会祈願。
- <u>[4]</u> 聖ホセマリア『知識の香』65 番。
- [5] 申命記8·2-5参照。
- [6] 出エジプト15・22~17・7参照。
- [7] 申命記8・2-3。
- [8] 箴言23·26。
- [9] 民数記14·20~参照。
- [10] ヘブライ4・9-10。
- [11] 『知識の香』58番。
- [12] 家族の集いでのメモ、1972年10 月18日(A. Sastre, Tiempo de Caminar, Rialp, Madrid, 1989, p. 353)。

- [13] フランシスコ、「お告げの祈り」でのことば、2014年3月9日。
- [14] ヨハネ4·5-52 (四旬節第三主日 A年福音朗読)。
- [15] ヨハネ9·1-41 (四旬節第四主日 A年福音朗読)。
- [16] ヨハネ11·1-45 (四旬節第五主 日A年福音朗読)。
- [17] 「Deus, omnium misericordiarum et totius bonitatis auctor, qui peccatorum remedia in ieiuniis, orationibus et eleemosynis demonstrasti, hanc humilitatis nostrae confessionem propitius intuere, ut, qui inclinamur conscientia nostra, tua semper misericordia sublevemur」(ローマミサ典書、四旬節第三主日、集会祈願)。

- [18] カトリック教会のカテキズム、 1434番参照。
- [19] 聖ホセマリア『神の朋友』138 番。
- [20] 「tibi sine te placere non possumus」(ローマミサ典書、四旬節第四土曜日、集会祈願)。
- [21] マタイ6・6参照。
- [22] -ヨハネ4・20。
- <u>[23]</u> カトリック教会のカテキズム、 1116番。
- [24] 聖ホセマリア、説教メモ、1970年4月26日(J. López y E. Burkhart, Vida cotidiana y santidad en la enseñanza de San Josemaría, Rialp, Madrid 2013, vol. III, p. 377)。
- [25] 聖ホセマリア『道』310番。

[26] 「Passio Domini nostri Iesu Christi, intercessio beatae Mariae Virginis et omnium Sanctorum, quidquid boni feceris et mali sustinueris, sint tibi in remedium peccatorum, augmentum gratiae et praemium vitae aeternae. Vade in pace」(Ordo Paenitentiae [1974]、93番)。

[27] ルカ15・22-44参照。

[28] 聖ホセマリア『鍛』438番。

[29] 四旬節第四主日、入祭唱(イザヤ66·10参照)。

[30] 聖ホセマリア『十字架の道行』 第十四留。

[31] 詩編50(51)・14。

Alfonso Berlanga

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shijyunsetsu-fukkatsusai-michi-complete/ (2025/12/16)